

論文

戦前期日本におけるコメニウス言説再考

相馬 伸一

〔抄 録〕

This thesis is part of comprehensive survey of discourses of J. A. Comenius in prewar Japan. When national education system, one of the main agents of the formation of nation state, was established in mid 19th-century Japan, Czech thinker in the 17th century, Comenius was introduced as a precursor of modern education. More detailed examination of the process is expected for the deeper understanding of the acceptance of Western education in Japan.

Through examining the books and magazines mainly concerning education published up to 1945, the author discovered more than 20 articles about Comenius, which have not been mentioned in the previous survey. In this series of theses, the author lists them up and reconsider the process in which the interpretation of Comenius changed and diversified. This thesis pays special attention to the article entitled as "Komeniusu-shi Ryakuden (A Brief Biography of Mr. Comenius)", appeared in *Chiba Kyoikukai Zasshi* (The Journal of Chiba Education Society) in 1882.

キーワード：コメニウス、西洋教育受容、教育思想史、メタヒストリー

総 序

17世紀チェコの思想家ヨハネス・アモス・コメニウス (Johannes Amos Comenius, 1592-1670. チェコ語表記では、ヤン・アモス・コメンスキー (Jan Amos Komensky)) は、欧米各国で国民教育制度が成立した19世紀、教員養成の教科書として書かれた教育史 (教育思想史) において近代的な教育の先駆者として記述された。それは日本が開国から近代化へと向かい、西洋教育を積極的に受容した時期と符合しており、ゆえにコメニウスは日本ではもっぱら教育家としてあつかわれてきた。たしかにコメニウスの教育論は現代にも多くの示唆を与え、その思想は全体として教育的であるともいえる。しかし、コメニウスは、教育以外でも神学・哲学・自然学・歴史・文学・言語・政治等にわたって重要な事績を残している。

コメニウスに限らず、思想の理解は歴史的影響を免れない。思想の新たな解釈には、思想の解釈の歴史的検討というメタヒストリー的視点が必要である。私は、2014年から2015年にかけてコメニウス研究の国際的なセンターであるチェコ共和国科学アカデミー哲学研究所で研究に従事したが、コメニウスが生まれたチェコ共和国でもメタヒストリー的関心からの研究が蓄積されつつあったのは幸いなことであった[相馬 2015]。そこでの研究の成果に学び、日本におけるコメニウス受容の問題も関連づけ、私は、佛教大学教育学部に赴任した2018年の8月、九州大学出版会から同会の第9回学術図書刊行助成対象作として『コメニウスの旅——〈生ける印刷術〉の四世紀——』を上梓した。

同書が日本教育学会、教育哲学会、教育史学会の機関誌で書評や図書紹介の対象となり、おおむね好意的な評価を得ることができたのは有難いことであった[眞壁 2019][太田 2019][井ノ口 2019]。さらに、2019年10月23日、同書の評価により私は佛教大学第16回学術賞(社会科学部門)を受賞した。コメニウスはチェコ宗教改革においても重要なキリスト教思想家であるが、そうした対象の研究にも評価が与えられる佛教大学の知的寛容性は、学術研究においてすら即効的有用性ばかりがもてはやされ、新冷戦ともいわれる不寛容が高まるなかで、文字通り稀有なことであると感慨を深くし、そこに奉職する一人としてさらなる精進を決意した次第である。

歴史は新たな資料が見つかったり、異なった視点がとられたりすることで常に書き換えられていく。同書がおおむね好評価を得たとはいっても完璧ではない。そもそも完璧などということはあり得ない。絶えざる探求があるのみである。ポストモダンといわれる風潮に与する教育学研究者のうちには、事実の地道な検討を「穴埋め」などと決めつけて見下す傾向が散見される。ポストモダニズムが、実証主義的な歴史研究者が自覚的にせよ無自覚的にせよ自身を科学の使徒と見なし、権威性やイデオロギー性を隠蔽してきたことを指摘したのは重要であろう。しかし、すでに存在が認められているテキストすらもろくに参照しないのは論外としても、書こうとするテーマに関連する事実が他にないかどうかを検討するのは、まともな研究をしようと思うなら外せない手続きのはずである。そうした基本的な手続きを怠るなら、「サボってる系」[岩下 2019: 94]と指摘されても仕方がない。こうした風潮には強い危惧を抱くが、同時に自身の戒めとせねばならぬと思う。私自身、コメニウス研究の先達であり、多くの知的恩恵を与えてくれた太田光一氏（会津大学名誉教授）からも、「翻訳ではない、日本人による最初のコメニウス紹介は「コメニアス氏略伝」(千葉教育会雑誌、1882)であることは井ノ口の目録によっても知られているが、相馬の力をもってしてもこの著者も典拠も分からなかったのは残念である」[太田 2019: 203]という宿題をもらっている。

もっとも、過去の研究が優れており、時を追うにつれて質が低下し続けているなどとはいえない。本連載のなかでも指摘していくが、類似したテーマを扱いながら、先行研究を十分に参照せず、過去の水準に達していない研究はコメニウス研究関連でも見られる。とくに、

1970年くらいまでに現れた研究には、戦前と戦後の断絶ということなのか、戦前の研究成果が参照されていないものが目につく。逆に、感心するほど多くの資料を渉猟し、著者が不偏不党で記述したと宣言していても、筆の滑りか事実誤認が明らかな誤りが見られることもある。みずからが教育の学術界と出版界に身を置いた藤原喜代蔵(1883-1959)が著した『明治大正昭和 교육思想學說人物史』(4巻)では、存命中の人物に対しても遠慮会釈なく評価批判が加えられ、その筆致は快刀乱麻というほかはない。しかし、ルソーやペスタロッチとの比較からコメニウスを客観的自然主義者と位置づける当時流布した位置づけを受容したのはやむを得ないとしても、次の短い言及だけでも少なからぬ間違いがある。

「ベーコンの哲学を教育の上に適用したといわれるコメニウスは、宗教上の迫害を受けてその生国オーストリアからオランダに逃れ、そこで同志のラートケと共に、帰納的研究法を始めたベーコンの書を研究し、『大教授書』(引用者注、『大教授学』)を公にして初めて教育学を系統的に述べた。」[藤原 1942: 241-242]

コメニウスが宗教上の理由から祖国を去って最初に移ったのはポーランドだし、コメニウスはラートケに教えを乞うたが返事を得られなかったエピソードがあり、2人は同志とはいえない。そして、ラートケはオランダに来てもない。コメニウスがベーコンを讃嘆したことから、コメニウスが帰納法を採用したという記述は海外でも多くあり、この点は藤原を責めることはできない。藤原の業績は西洋教育の導入と展開の現場からの貴重な証言だが、それにしても無批判に鵜呑みにはできないわけである。

私は、2017年度から科学研究費補助金・基盤研究(B)「教育思想史のメタヒストリ研究」の交付を受けているが、2020年がコメニウスの没後350年にあたることもあり、同研究の一環として、明治からおおよそ1945年までに発行された書籍や雑誌記事について改めて調査することにした。最初は前述の太田光一氏からの指摘に応え、『千葉教育会雑誌』に掲載された「コメニアス氏畧傳」の典拠と著者について調べられればよいと考えていた。しかし、この謎は思ったより手強く、さまざまな資料を渉猟しているうちに、課題が拡大してしまったというのが偽らざるところである。その結果、本稿の擱筆までの段階で、井ノ口淳三氏(追手門学院大学名誉教授)によって日本教育学会紀要『教育学研究』第44巻第3号(1977年)、『追手門学院大学人間学部紀要』第8号(1999年)及び日本コメニウス研究会年報『日本のコメニウス』(第1号、1991年～第20号、2010年)に発表された目録には未収録の論考を20編以上確認することができた(同一内容の論考が転載されたものや連載は一括してカウントしている)。本稿を皮切りに本誌及び『佛教大学教育学会紀要』において、戦前期日本におけるコメニウスに関する論考等が現れた順に再構成し、調べがついた限りで概要等を付して若干の考察を加えていくこととする。井ノ口の目録に新たに付け加えるものには「*」を付す。

調査対象

本稿の調査対象は次の5つのカテゴリーに分けられる。

第1に、藤元直樹「幕末・明治初期雑誌目次集覧」（国立国会図書館、『参考書誌研究』、第65号、2006年）及び佐藤秀夫編、『明治前期文部省刊行誌集成』（第1巻～第10巻、歴史文献、1981年）により、明治初期に現れた文部省関係雑誌について検討した。ここでは、同集成に所収の『文部省日誌』（1872年、1873年、1878年～1882年）、『文部省雑誌』（1873年～1876年）、『教育雑誌』（1876年～1883年）、『文部省報告』（1873年～1883年）、『文部省雑誌 合本』を対象とした。これらの雑誌では、1874年頃からは欧米を中心とした海外の教育事情の紹介に混じって教育論の紹介も行われるようになった。この作業と合わせて、1880年発刊で福澤諭吉や加藤弘之も教育論を寄稿した『東京学士会院雑誌』、1883年に発刊され1900年に『教育』に引き継がれるまで205号発行された『東京茗溪会雑誌』の掲載記事もチェックした。

第2に、『東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫所蔵雑誌目次総覧』（大空社、1993年）の総合編（第1巻、第2巻、第3巻、第4巻、第5巻、第6巻、第86巻、第87巻、第88巻、第89巻、第90巻、第133巻、第134巻、第135巻、第136巻、第137巻）と哲学思想編（第7巻、第8巻、第9巻、第10巻、第11巻、第12巻）、子供・青年編（第73巻、第74巻、第75巻、第76巻、第77巻、第78巻、第131巻）、宗教編の一部（第23巻、第24巻、第138巻）を参照した。これは、明治初期にかけては雑誌のジャンルの未分化であったことを考慮したのと、教育分野に限定しない調査が必要であると考えたからである。コメニウスをもっぱら教育者にとらえる近代的な理解を問題にしながら、調査対象を教育分野の絞るのでは矛盾している。とはいえ、際限なく対象を広げることに無理がある。『アララギ』や『ホトトギス』まで調査しなければならないということにはならないだろう。そこで、ひとまず同総覧で紹介されている明治新聞雑誌文庫所蔵分の目次を調査することとした。この文庫には各地の学校やその同窓会等の雑誌も部分的に含まれているが、はたしてそのなかにもコメニウスをあつかった記事を確認できた。このことは、そうした諸雑誌の調査にも一定の意味があることを示しているが、相当の時間と労力が必要な課題であり、それらの調査をどう進めるかについては改めて検討することとする。

第3に、教育ジャーナリズム史研究会編、『教育関係雑誌目次集成』（日本図書センター、1993年）により、第Ⅰ期（教育一般編）、第Ⅱ期（学校教育編）、第Ⅲ期（人間形成と教育編）、第Ⅳ期（国家と教育編）についてコメニウス関係の論文や記事の有無を調査した。ここでは、戦前、日本が統治した地域の雑誌も調査対象とした。教科教育や特別支援教育関係の雑誌は調査対象から除外すべきかとも考えたが、『初等教育』にペスタロッチの算術教育がとりあげられ、『口話式聾教育』に「ペスタロッチと聾啞教育」といった論考が見られる事例もあり、

ひととおりフォローすることとした。

第4に、上記の『教育関係雑誌目次集成』に含まれていない地方教育雑誌の調査に着手した。まず復刻版が佛教大学附属図書館に収蔵されていた北海道（北海道教育会雑誌／北海道教育雑誌／北海之教育）、長野県（信濃教育会雑誌／信濃教育）、および沖縄県（琉球教育）について調査した。続いて、『明治新聞雑誌文庫所蔵雑誌目次総覧』（大空社、1993年）の教育編（37巻、38巻、39巻、40巻、41巻、42巻、129巻、130巻）を参照した。しかし、地方教育会雑誌は所蔵機関が分散しているうえに所在が確認されていない巻号も少なくない〔梶山・須田2006〕。京都府立京都学・歴史館は、『京都市教育』のうち自館が所蔵しておらず北海道大学附属図書館が所蔵している巻号をコピーして参考に供するという心憎いサービスを行っていて感心させられた。しかし、広島県の『芸備教育』（1904～1941年分）のインターネットで所蔵が確認されている巻号をすべて確認しようとすると、広島大学附属図書館（中央図書館）、広島県立図書館、鳴門教育大学附属図書館を訪れる必要があった。本稿の段階で、東京都立中央図書館を訪問し東京都に関して1誌（東京市教育時報）、京都府立京都学・歴史館を訪問して京都府・京都市関係で5誌（京都市教育会報／京都市教育／筒城（綴喜郡）／何鹿教育／宮津）、大阪府立中央図書館、大阪府立中之島図書館、大阪市立中央図書館を訪問して大阪府・大阪市関係で2誌（私立大阪教育会報告／東成区教育会報）、広島大学附属図書館、広島県立図書館、広島県立大学学術情報センター図書館、鳴門教育大学図書館、青山学院大学附属図書館を訪問し、広島県に関して4誌（山縣郡私立教育会報／広島教育協会雑誌（改号）／広島県私立教育会雑誌／芸備教育）、徳島県立図書館を訪問し徳島県に関して5誌（阿



図1. クレップル『教育哲学史』後編より

Das Reich und die Landschaft.
Pred. Cal. Capt. X., 16. Wehe dir Land, des König ein
Kind ist, und des Fürsten frue essen.



Viel Städte und Dörffer machen ein Land und ein Reich. Ein König oder Fürst hat seinen Sitz in der Hauptstadt: 1, die Edelleute, Freyherrn und Grafen wohnen auf den umliegenden Schlössern: 2, die Bauern auf den Dörffern: 3. An den schiffreichen Flüssen: 4 und Landstraßen: 5 hat ein Fürst seine Zöllhäuser, wofelbst von den Schiffen und Reisenden die Maut und der Zoll gefordert wird. (Aus Orbis sensualium pictus quadrilinguis. Nürnberg 1679, pag. 586.)

図2. クレップルの原著 (92、93頁) より

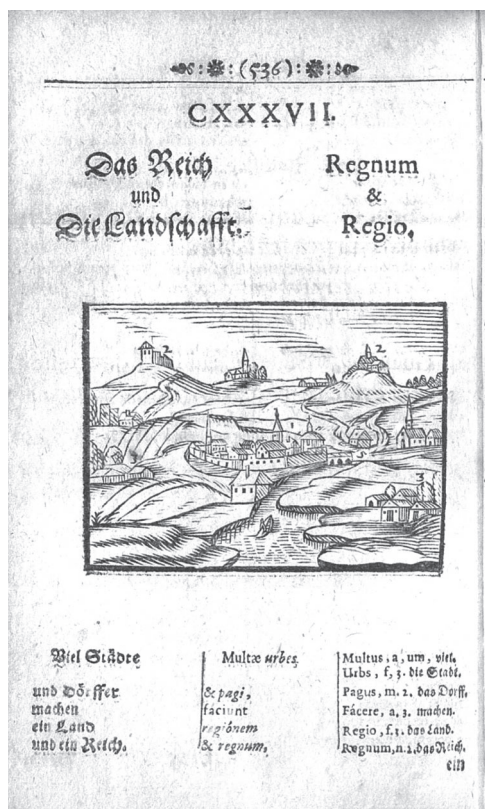


図3. 『世界図絵』（ニュルンベルク、1679年版）、536ページ。一橋大学社会科学古典資料センター所蔵

波国教育会雑誌／阿波教育会雑誌／麻植教育／会誌（林町教育会）／会報（徳島県教育会教員互助会）の現存資料を確認できた。しかし、郡レベルも含めると全国ではさらに180を上回る雑誌を調査する必要がある。本稿と同趣旨の調査のニーズは少ないとはいえあると思われるが、地方教育会雑誌の所蔵の探索と目次の集成が望まれるところである。今後、継続的に調査を進めていく予定である。

第5に、西洋教育の導入にともなって現れた教育の古典と目されるテキストの解説書のうち、コメニウスに相当のウェイトが割かれているものを調査した。近代日本におけるコメニウス受容が、19世紀の後半から欧米で盛んに出版された教育史（教育思想史）の翻訳から始まったことからすれば、それらのテキストにおけるコメニウス言説を再検討することも重要であり、この点は拙著『コメニウスの旅』で若干試みた。

コメニウスの名が日本で活字として世に出回った端緒は、アメリカのライナス・ブロケット（Linus Pierpont Bockett, 1820-1893）がフィロビブリウス（Philobiblius）のペンネームで著した『教育の歴史と進歩』（*History and Progress of Education, from the Earliest Times to the Present*, New York: A. S. Barnes, 1860.）を西村茂樹（1828-1902）が翻訳し、1875年に文部省から出版された『教育史』（上・下）であると考えられる。その後しばらく間をおいて1880年代末から90年代初頭にかけてアメリカ、イギリス、ドイツ、フランスの教育史テキストが続々と翻訳され、コメニウスは近代教育の先駆者として紹介された。

そのうちのひとつであるドイツのクレメンス・クレッペル（Klemens Klöpfer, 1847-1913）による『教育学史講座』（*Repetitorium der Geschichte der Pädagogik von Denältesten Zeiten Bis Auf Die Gegenwart*）も『教育哲学史』（国府寺新作、鈴木力訳、博文堂、前編1886年、後編1889年）として翻訳出版されたが、後編の59ページにはコメニウスの『世界図絵』の1章が挿絵付きで紹介されている（図1）。原著の92～93ページの該当部分を合成したのが図2、ここで典拠とされている『世界図絵』の1679年ニュルンベルク版（4カ国語版）の該当ペー

ジが図3である。1889年といえば、コピーの技術もなく、ようやく紙幣の印刷に写真術が導入された頃のことである。クレッペルの原著の挿絵も、コメニウスの原著の挿絵をもとに制作されているのは、2つの図が微妙に異なることからわかるが、日本語訳の挿絵はクレッペルの原著からさらに制作されたものであることが見てとれる。かなり丁寧に翻刻され、図画のなかに描かれた街や城に付された番号も漢数字に改められている。クレッペルの原著では太字になっている語は翻訳では大きく印字されるなど、配慮の行き届いた工夫が見られる。これが、『世界図絵』の挿絵が日本に紹介された嚆矢だと考えられる。

とはいっても、これらの教育史テキストはコメニウスを主題的にとりあげたものとはいえない。他方、1880年代の後半からは、いわゆる通史としての教科書とは別に、教育家の列伝や教育の学説や古典の解説書が現れるようになった。1885年には、東京の普及舎が、ロック、ペスタロッチ、アンドリュウ・ベル、ジョセフ・ランカスター、サミュエル・ウィルダースピン (Samuel Wilderspin, 1791-1866)、デイヴィッド・ストウ (David Stow, 1793-1864)、ハーバート・スペンサーをあつかった『七大教育家列伝』を発刊している〔普及舎 1894: 71-72〕。これは、スコットランド師範学校のジェイムズ・ライチ (James Leitch, 1833?-1884?) の『實際的教育家とその教授体系』(*Practical Educationists and Their Systems of Teaching*, Glasgow: J. Maclehose, 1876.) の訳書である。国会図書館をはじめ国内の学術機関には所蔵が確認できないが、当時の教育雑誌の広告では、同じ普及舎が1886年に『三大教育家肖像 (ペスタロッチ、スペンサー、フレーベル)』を発行している。1887年には、現在の茨城県坂東市に子守学校を興したことで知られる渡辺嘉重 (1858-1937) の編訳で、『欧米大家教育格言』(金松堂) が出版されている。ここには、スペンサー、ミル、ジェイムズ・ジョホノット (James Johonnot, 1823-1888)、アレクサンダー・ベイン (Alexander Bain, 1818-1903) といった当時ヴィヴィッドであった群像とともに、プラトン、アリストテレス、ベーコン、ロック、ペスタロッチ、カント、フレーベル、そしてコメニウスといった教育思想史の常連ともいえる面々が紹介されている⁽¹⁾。こうした書物のなかにはコメニウスを相当のウェイトであつかったものがある。

しかし、どこまでをコメニウスについての文献と見なすかは判断に困るところである。井ノ口の目録では除外されているケースが多い。本稿では、生涯の簡単な紹介にとどまらず、コメニウスの思想や教育学説を紹介し、なおかつ分量が他の思想家に比して十分な量であると判断されるものを含めることとし、そうでないもので紹介の価値があると思われるものは「番外」として示すこととした。

なお、読みやすさの便の考慮と、本稿が対象とするコメニウスが民族や年齢を超えた知識の共有に尽くした人物であることを踏まえ、基本的に論題以外は旧字体を新字体に改め、漢字表記を適宜かな／カナ表記に改め、人名表記の揺れも統一したことをお断りする。また、思想史及び教育思想史関連で一般に知られた人名の原綴りや生没年の記載も省略する。

後述するように、『千葉教育会雑誌』の「コメニウス氏畧傳」及びこの論考が含まれる一連の記事は、単にコメニウスにとどまらず、日本における西洋教育思想受容において無視できない重みをもつと考えられる。そこで本稿では、とくに同論考とその周辺に注目する。

明治前期の文部省関係雑誌

先行研究が明らかにしているように、明治前期の文部省関係雑誌には、フレーベルに関してはすでに相当の言及が見られる〔浦田 1972〕〔酒井 2001〕。しかし、コメニウスを主観的にとりあげた記事は見当たらなかった。しかし、1875 年の『文部省雑誌』第 19 号（同年 12 月）の独逸教育月報抄の「教則論」という記事の冒頭には、ごく短いが次のような言及がみえる（『文部省雑誌 合本』にもあり）。

「コメニウスかつて言えるあり、すべて業を就す者は数業を兼業することなかれ、必ず一業を卒してしかして後に他業に及ぶべしと。」

これを訳出したのは、1871 年 11 月から 1873 年 9 月の岩倉使節団に同行して欧米を訪問し、帰国後は文部省御用掛となり、のちに司法官僚に転じた近藤鎮三（1849-1894）である。近藤は、この時期の『文部省雑誌』にドイツ語の教育文献を数多く訳出している。1876 年 12 月の『文部省雑誌』第 23 号の独逸教育書抄の「ペスタロッチ氏の略伝」を訳したのも近藤であった（この略伝は、石橋と清水によるペスタロッチ関係の目録ではフォローされていない）。この訳文には「パイル撰」とあるが、これはアメリカ・ペンシルヴェニアの教育者で、教育関係の著作を多く著したジェイムズ・パイル・ウィッカーズハム（James Pyle Wickersham, 1825-1891）のことであろう。

「コメニウス氏畧傳」とその記述の特質

「コメニウス氏畧傳」は、『千葉教育会雑誌』が発刊されて同年中の 1882 年 11 月 1 日発行の第 8 号、同年同月 15 日発行の第 9 号、同年 12 月 1 日発行の第 10 号にわたって「賢哲畧傳」の一部として掲載された。当時の『千葉教育会雑誌』は 1 ページが上下 2 段に組まれているが、この論考には概算で 4.35 ページほどと、「賢哲畧傳」のなかでコメニウスにもっとも分量が割かれている。以下、同論考に見られる特徴的な記述を列挙する。

①コメニウスのファーストネームは「ジョン」と記載されている。

チェコ語のヤン（Jan）は、ラテン語ではヨハネス（Johannes）、ドイツ語ではヨハン（Johann）、フランス語ではジャン（Jean）、英語ではジョン（John）と表記される。現在でも、英語文献では John と記載されていることが多い。このことは典拠が英文であることを想像させる。

② 18 世紀ドイツのバゼドウ、19 世紀スイスのペスタロッチの先覚者として、「近世教育の一

大家」として位置づけられている。

ペスタロッチを重視するのはごく自然なことだが、汎愛派のパゼドウをとくにとりあげているのは特徴的な記述といえる。

②出生地はオーストリアのモラヴィア州コムニャとされている。

当時、チェコ地域はオーストリア＝ハンガリー帝国の一部であり、この表記は間違いとはいえない。コメニウスという姓は現在のチェコ共和国ズリーン州の村コムニャに由来するという説があり、ゆえにコムニャはコメニウスの出身地と考えられることがある。しかし、彼の父がこの地域ではウヘルスキー・フラディシュチエと並ぶ大きな街であるウヘルスキー・プロトの市民であったという事実があり、住んでいたという家も保存されていることもあって、ウヘルスキー・プロト説もある。しかし、コメニウスは、1611年にドイツのヘルボルンの大学に修学したとき、ヨハネス・アモスまではよいのだが、そのあとを「ニヴニツェンシス」とサインしていたことが明らかになっている。これは「ニヴニツェ出身の」を意味する。以後、ニヴニツェ説がとられることが多い。

③所属教団を「ボヘミアン・プレスレン」と記載している。

コメニウスは、チェコ兄弟教団の家に生まれ、後年、その最後の主席監督となったが、この表記は英語である。チェコ兄弟教団は、チェコ語ではイエドゥノタ・ブラトゥルスカー(Jednota bratrská)と呼ばれ、チェコ、ボヘミア、モラヴィア等の地名はつかない。コメニウスが現在のチェコ共和国東部のモラヴィア出身であることから、モラヴィア兄弟団と表記されることもあるが、コメニウスの所属した教団は西部のボヘミアと一体として活動していた。ボヘミアはチェコのラテン語表記であり、現在のチェコ共和国西部地域のことだけでなく東部のモラヴィアを含んで用いられる場合もある。ゆえにボヘミア兄弟団という記述で問題はないのだが、チェコ西部というニュアンスを避けるためにはチェコ兄弟教団の方が適切と考え、私はそちらを採用している。この記述も典拠が英文であったことを想像させる。

⑤三十年戦争によるスペイン人の侵攻でフルネックが略奪され、書籍・文書・草稿等の多くを失ったと記載。

相当に詳細な記載といえる。

⑥1631年出版の『開かれた言語の扉』を「ジャニユア、リンガラム、レセラタ」と記載し、「関鑰を下さる舌門」と訳している。

『開かれた言語の扉』のラテン語原題の *Janua linguarum reserata* は、英語テキストでは、*The Door of Languages Unlocked*、または *The Door of Tongues Unlocked* 等とされているが、「舌門」という訳になったのは後者の英題によったためであろうと思われる。『開かれた言語の扉』はドイツ語では *Die geöffnete Sprachentür* と訳されるのが一般的で、舌を意味する *Zunge* が用いられることはない。

⑦1638年にスウェーデンに招聘されるが応えられず、しかし「児童教育書中巻冊の巨大なる

者」をラテン語に訳して寄贈したと記載。

これはチェコ語で著した『教授学』をもとにラテン語の『大教授学』に改稿したことを指している。コメニウスの教育理論の主著とも見なされてきた『大教授学』の書名が言及されていない一方、スウェーデンとの関係は詳細に扱われている。

⑧上記の書はレシュノで構想してゲルマン語で著され、イギリス在住の友人がその抜粋を「プロドモス、パンソフィエ」として発行したと記述。

ここには事実の混同が見られる。『教授学』は亡命以前に着想されており、コメニウスがポーランドのレシュノに移って4年ほどで完成したが、ドイツ語ではなくチェコ語で著されている。コメニウスは、言語教科書『開かれた言語の扉』の出版で脚光を浴びるが、ヘルボルンでの修学以来の哲学的関心を発展させ、独自の哲学的体系としてのパンソフィア（汎知学）を構想していた。その序論として著し、やや後に改題されたのが『パンソフィアの先駆け』（*Prodromus pansophiae*）であったが、これもドイツ語では書かれていない。ロンドンで活動していたコメニウスの盟友のサミュエル・ハートリブ（Samuel Hartlib, 1600-1662）は、この書を1637年にコメニウスには無断でオックスフォードから出版し、コメニウスがロンドンに来訪していた1642年に『諸学校の改革』（*A Reformation of Schools*, London, 1642）と題して英訳出版した。この翻訳には、『大教授学』の目次が英語に翻訳され、巻末に付されていた。

⑨スウェーデンの依頼を受けて編纂した教授法の書を1646年に完成してスウェーデンを訪問と記述。

かなり詳細な記述である一方、ここで著された『言語の最新の方法』の書名は言及されていない。

⑩ハンガリー滞在からレシュノに戻ったところをポーランド軍の掃討に遭ってアムステルダムに非難する経路を、シュレジア、ブランデンブルク、シュテッティン、ハンブルクと詳細に紹介。

⑪言語は目的ではなく、知識を得る「方便」と記述。

コメニウスの言語観が道具的であるという解釈が示されている。

⑫言語を重視しつつも、事物主義をとったことを論じ、その学習の順序は、(1) 神、万物（世界）、道理（精神）からなるパンソフィア、(2) 伝記、博物誌、発明史、万国史、徳行家伝、諸宗教の風物誌からなるパンヒストリア、(3) 一種の心理学としてのユニヴェルサルドグマナチックをたどると説明。

1630年代後半から1640年代初頭にかけて、コメニウスはパンソフィア構想に関連して、パンソフィア、パンヒストリア、パンドグマティアという3つの普遍的書物について考察した。教育学的にみれば、これは一種のカリキュラム論といえる。コメニウスの盟友でありながら、『大教授学』の比喩的方法を批判したことで知られるヨアヒム・ヒューブナー（Joachim Hübner, 1611-1666）らとの間にはこの件をめぐる書簡のやりとりがある。その後、コメニウ

スがロンドンを訪問した際に著した『光の道』の第16章4節で、コメニウスは3つの普遍的書物としてあげたのが、パンソフィア (Pansophia)、パンヒストリア (Panhistoria)、パンドグマティア (Pandogmatia) であった。「コメニウス氏畧傳」ではパンドグマティアを一種の心理学であると説明しているが、これは正しくない。そして、「ユニヴェルサルドグマナチック」と訳されている。これは英語をカタカナ表記していると考えられるが、「ドグマナチック」という表記も正しいとはいえない。しかし、かなり詳細な言及といえる。

⑬ベーコンの影響、男女が共に教育を受けること、身体教育の重要性を指摘したことを紹介。『大教授学』の内容に関連しているが、強調のなされ方に特徴が見られる。

⑭教育方法の考察に多くの比喩が用いられているのを「荒唐に属するもの多し」と記述。

コメニウスのとったアナロジー的方法論が批判的に言及されている。

⑮『世界図絵』を「庶物指教の嚆矢」として紹介。

実物を観察することが望ましいが、それがかなわない場合の図画の効用が指摘されるなど、直観教授を重視している。この論文以前に現れた教授学書での訳語にしたがって「庶物指教」が用いられている。

⑯教授が、練修と道徳と教法を一体として行うべきであるとしたと紹介。

学識・徳性・敬虔の一体的な学習という『大教授学』の論点を比較的確に記述している。

⑰「自然の順序」にしたがった教育を構想したと紹介。

この点はとくに特徴的であるとはいえないが、コメニウスの教育思想を自然主義の系列に位置づけようとする際によくみられる記述である。

⑱「教育は智識を目的するべし」という主張はいまだ不十分であると批判しつつ、教育史上の不朽の偉人であると評価。

コメニウスの教育思想を主知主義的であるとする評価は、この時代に比較的良好に見られる。その一例といえる。

⑲元来は、スラブ人、チェコ人であるが、ドイツ語圏で教育を受けたゆえにドイツを本国としていると説明。

とくに20世紀のチェコスロヴァキアの独立以降には批判されるようになったゲルマン主義的な説明ともみられる。

⑳1871年がコメニウス没後200年であるとし、生地モラヴィアのほかヨーロッパ各国やアメリカでも記念の催しが持たれたことを説明。

コメニウスの没年は1670年だが、当時はまだ1671年と考えられていた。

㉑モラヴィアの教師の発願からプラハの彫刻家セイダン教授の制作によって1875年8月23日にブシェロフで「水漉石」(スラングステン)製のコメニウス像が除幕された。

この像の序幕は正しくは1874年だが、彫刻家名のトマーシュ・セイダン (Tomáš Seidan, 1830-1890) や石像の素材までが言及されている。この論考が1882年の掲載であることから

して、わずか8年前の出来事に言及されていることになる。

ここで列挙した項目のうち、⑩、⑪、⑫、⑬は、明治前期の日本におけるコメニウスについての言及には見られない詳細なものである。このような記述が、この時期に地方教育会雑誌に現れたという事実は、当時の日本における西洋文化摂取熱の高さを如実に示すものといえる。

「賢哲畧傳」の構成とその特質

「コメニウス氏畧傳」は『千葉教育会雑誌』の第1号から13号まで掲載された「賢哲畧傳」の一部である。この連載の表題は、賢哲の言行、賢哲の略傳、賢哲の畧傳、賢哲略傳など不統一だが、連載と考えてよいだろう。

とりあげられた人物とあつかわれたページ数の概算を示すと、第1号でペスタロッチ（2.25ページ）、第2号でルイ・アガシー（Jean Louis Rodolphe Agassiz, 1807-1873）（1.55ページ）、第3・4号でアリストテレス（3ページ）、第5号でアンドリュウ・ベル（1.65ページ）、第6・7号と8号の一部でフランシス・ベーコン（2.9ページ）、第8号の一部と第9・10号でコメニウス（4.35ページ）、第11号でフレーベル（2ページ）、第12号でウォレル・コルバーン（Warrell Colburn, 1793-1833）（1.9ページ）、第13号でフィヒテ（1.3ページ）である。今日、アガシーとコルバーンが教育史でとりあげられることはほぼない。また、こうした人物の選択が通史的な図式にもとづくものではないことも明らかだ。古代ギリシアは、プラトンではなくアリストテレスのみがとりあげられている。中世やルネサンスの群像はとりあげられず、ベーコンとコメニウスといった初期近代の群像にページが割かれている。ペスタロッチ、フレーベル、フィヒテといった広い意味でのドイツ系の思想家もとりあげられているが、アガシー、ベル、コルバーンのように英米を活動の舞台とした人物に焦点があてられている。以下、コメニウス以外の人物についての記述の特質を拾っておく。いずれの人物も生没年月日が記され、フィヒテ以外は生没地も書かれている。

ペスタロッチについては、「普通教育法の今日の如く改良進歩したるの功は氏をおいてそれ誰にか帰せん」と位置づけられている。彼が当時の政治状況に失望し、ノイホーフでの貧民教育に至った経緯の記述が詳細である。その後の文筆活動について書かれているが、著作名は示されておらず、その後の教育活動についての記述も薄い。「教育はすべて造化自然の法則に従ってこれを進めざるべからず」として自然主義の主張が紹介され、男女の違い、形・数・語の教育、道徳教育における母の役割、競争の効果への注目等が簡潔に紹介されている。「ソクラテスの教法学はバゼドウ及びその他の学士の説に従い、今日用いがたきものとなすべし」として口授と復唱からなる授業が構想されたと紹介している。また、教育を成り立たせるのは、教師生徒の間で「恩義をもって相感」することにあるとされている。

アガシーについては、祖先がユグノーであったことやアンリ4世のナント勅令についての詳細な記述から始まる。アメリカに渡ったのち、篤志家から5万ドルの支援を受けて動物学の学校を開いたこと、ラテン語、ヘブライ語、フランス、ドイツ、英語等の6カ国語を操ったこと、アリストテレスやプラトンの著書を講じたこと、板書で図解するのが巧みで多くの学生を引きつけ、アガシー自身が「教師アガシーというものは自身のもっとも誇るところだ」と述べたといったエピソードが紹介されている。

アリストテレスについては、20年プラトンに学んだが、次第に考え方が異なって別れたという記述から、「プラトンは理想学の主義を固守し、アリストテレスは実体学者にしてかつ経験知学の始祖たり」と位置づけられている。アレクサンダー大王の家庭教師となり、そのうちアテネに学校を設け、逍遙学派と呼ばれるようになった由来などが紹介されたのち、その教育観が要約されている。人間を涵養するのは「天然習慣及教授の三者」で、7歳までは習慣、それ以降は「教授をもって之を陶成する」期間とされたこと、子どもが健康に恵まれるには妊婦の健康が必要であり、「身体不具なる者はむしろ之を養育せざるべし」とされたこと、プラトンと同じく自由民への教育を主に考え、女子や下層階級の教育は度外視する貴族主義的な見解がとられたこと、自由民を対象にした学科は人世に須要なるもの・道徳・高尚な理論の三種に分けられたこと、読書・習字・体操・音楽あるいは図書（塑芸を含む芸術）の効用が強調されたこと、スパルタの教育を評価しつつも、低年齢での激しい運動は避けるべきこと、精神と身体は妨げ合うので、どちらかを鍛えているときは他方は抑えめにすること、音楽の道徳的効用が強調されたことなどが簡潔に記述されている。アリストテレスの記事にのみ、末尾に著者をうかがわせる「(尾)」という記載がある。

ベルは「互教法の発明者」として紹介されている。アルファベットを砂に書いて利口な子どもに手ほどきし、彼をその他の子どもたちを指導する助手として用いるというインドのマドラス（現チェンナイ）での着想が紹介されている。「エписコパル」教会の牧師であったベルの着想をランカスターが「デセンテル」派の学校で採用して普及したと紹介するなど、宗教的背景が比較的詳しく紹介され、ベルが「ナショナル、ソサエテ」（国民協会）、ランカスターが「ブリテン及外国学校社中」（内外学校協会）を結成したことなども言及されている。ランカスターは、著書でベルからその方法を学んだことを明記していることにも触れられている。他方、互教法そのものはスパルタの賢人リクルゴスにすでに見られると記載されている。最後に、ベルがペスタロッチやフェレンベルクの学校を見学し、12万ポンドもの大金を学校の普及に捧げ、ウェストミンスター寺院に埋葬されたことが紹介されている。

ベーコンは「英国理学者の一大家」と紹介され、父ニコラスの門地からして最良の教育を受けたであろうこと、ケンブリッジ修学、外国遊学後に、エリザベス女王やジェームズ王にも仕え、6000ポンドもの年俸を得て男爵となったといった栄華と、収賄の疑いによって2日とはいえロンドン塔に収監され、地位を剥奪されたことが、劇作家ベン・ジョンソン（Ben

Johnson, 1572-1637) や歴史家のトーマス・マコーリー (Thomas Macaulay, 1800-1859) を引用しつつ紹介されている。そして、『学問の進歩』、『ノヴム・オルガヌム』（表題を「万物及び人世説明新機」と紹介）の内容が概説され、「スコラチック・フィロソフィー（中古の理学）」に対抗し、アリストテレス的な三段論法を批判し、知識は事実より帰納すべきと主張したことが記され、「人間は造物主の臣僕にしてこれが説明者たり」という格言が紹介されている。教育についてはベーコンが「幼時の習慣」を重視したことが記され、スコットランド啓蒙後期の代表的な経済学者ドゥガルド・スチュアート (Dugald Stewart, 1753-1828) の評価が引かれている。

フレーベルは「幼稚園教授法の発明者」として紹介され、ルター派牧師の子として生まれ、管林官を経てイエナ大学に学び、「フランクフルト・オン・ゼ・メーン」（フランクフルト・アム・マインのこと）で模範学校の教師となり、イヴェルドンのペスタロッチを訪問し、さらにゲッティンゲンやベルリンで学び、1813年にドイツ解放戦争に従軍したのちにカイルハウに学校を設置するに至ったと、前半生がかなり詳細に紹介されている。そこで、手芸を重視した「生徒の自動性を暢発するの主義」の実践を15年続け、再びスイスを訪れて幼稚園を着想し、キンデルガルデンと名づけ、幼稚園はブランケンブルク、リーベンシュタインとマリーエンタール（リーベントルと表記）、ドレスデン、ハンブルクに普及したが、姪カール（正しくは甥のユリウス）が革命に参加し、社会党にコミットしていたことからプロシアの宰相フォン・ローメル（オットー・テオドル・フォン・マントイフェルのこと）の疑念を呼んで幼稚園禁止令が出されたと説明されている。他方、教育学説の紹介はわずかで、思想の論理性は弱かったが、意見を異にする者からも支持を得たと書かれている。

コルバーンについては、苦学して23歳でハーバード大に学んだ後、ボストンで教師となり、『暗算初步』で脚光を浴び、その方法はアメリカからイギリスにも伝播し、発行部数はアメリカでは10万部、イギリスでも5万部に達し、ヨーロッパの各国語にも翻訳されたと紹介し、その教育の原理はペスタロッチの方法に基づいていたが、その応用の功績はコルバーンにあり、アメリカの女子教育の先駆者であるジョージ・エマーソン (George Barrell Emerson, 1797-1881) からも評価されたと記されている。のちに実業界に転じたが、数学や博物学の講義も行ったとされている。

フィヒテは、「ゲルマンの哲学大家」、「国立教育のことを論述せる有名の著述家」として紹介されている。その哲学は、「カントの哲学を伸暢したるもの」だが、「外物は内部の急須によって精神中に製作するものなり。百般事物の活動並びに万物存在の要件はことごとく自己精神内にあり」という主張に立ち、カント的な「利学派」の道徳を批判したとされている。ナポレオン進駐時のベルリンでの講演が皇帝を感動させたことが、「すべて教育は知識と道徳との別なく人間の全性を暢発伸張するにあり」、「教育の大眼目は善良の人を鑄造するにあり」、「意志はすなわち人なるが故に善を行うの意志を暢発するにあり」等の主張とともに紹介されて

いる。当時の学校教育の知育と宗教教育を批判し、「私欲なき人物を鑄造する」国立教育（国民教育）を提唱したが、それが前世紀の「私益説」の反動であることは理解できるとしても、極端にすぎ、「ヘルバルト氏が反対説を唱うるの道を開墾せり」と締めくくられている。

冗長な紹介になってしまったが、「賢哲畧傳」の記述が、たとえ若干の誤りを含んでいるとしても、その記述は当時の日本で発行された文献と比較してもきわめて詳細であることは明らかである。

当時の主要な教育思想史、コメニウス関連テキストにおける記述

「賢哲畧傳」の飛び抜けて詳細な記述は何を典拠にしたものなのだろうか。そこで、当時に入手可能であった教育史、教育思想史およびコメニウス関連のテキストにはどのようなものがあつたかをおさえ、それらの記述を確認する。「賢哲畧傳」の記述は英文のテキストを参照したと考えられるので、ここでは英米系の著作にとくに注目する。

教育史ないし教育思想史は、国民教育制度の成立と並行して、欧米各国で教員養成の教科書として書かれるようになった。その嚆矢としては、ドイツのフリードリヒ・ハインリヒ・クリスティアン・シュヴァルツ（Friedrich Heinrich Christian Schwarz, 1766-1837）の『教育論』（1802-1813年）が知られるが、とくに大きな影響を与えたのは同じくドイツのカール・フォン・ラウマー（Karl Ludwig Georg von Raumer, 1783-1865）の浩瀚な『教育学史』（1842-1851年）である。ラウマーのテキストは、アメリカ合衆国の初代教育局長を務めたヘンリー・バーナード（Henry Barnard, 1811-1900）が編纂する『アメリカ教育ジャーナル』に英訳されて現われ、それがまとめられた『14世紀から19世紀にわたる教育史に貢献したドイツにおける傑出した教師及び教育者の回想』（*Memoirs of Eminent Teachers and Educators in Germany; with Contributions to the History of Education from the Fourteenth to the Nineteenth Century*, Philadelphia: J. B. Lippincott & Co., 1863.）は600頁に及ぶ大作である。これは、とくにドイツを中心に扱った英文の教育史としては当時もっとも詳細なものであった。

このほかでこの時期に英語で出版された主要なものとしては、イギリスのロバート・クイック（Robert Hebert Quick, 1831-1891）による『教育改革家』（*Essays on Educational Reformers*, London: Longmans, Green, and Co, 1868.）とオスカー・ブラウニング（Oscar Browning, 1837-1923）の『教育理論史序説』（*An Introduction to the History of Educational Theories*, London: Kegan Paul Trench, 1881.）が広く参照された。後者は、1887年に2種類の邦訳が現れている。この時期の大部の英語による教育史としては他にフランクリン・ペインター（Franklin Verzelius Newton Painter, 1852-1931）の『教育史』（*A History of Education*, New York: Appleton, 1886.）があり、これも1888年には邦訳が出ている。また、ラウマーには及ばないものの、フランスのガブリエル・コンペレ（Gabriel Compayré, 1843-1913）の『教育学史』（*Histoire*

de la pédagogie, Paris: Paul Meloottée, 1879.) は詳細で広く用いられ、アメリカで最初の教育学教授職に就いたウィリアム・ペイン (William Payne, 1836-1907) が 1888 年に英訳出版し、英語版からの重訳による邦訳も 1892 年に現れている。また、ペイン自身も『エンサイクロペディア・ブリタニカ』に分担執筆で教育史について書いており、それは『教育略史』(*A Short History of Education*, Syracuse: C. W. Bardeen) として独立して出版されたが、その出版も 1881 年である。姓が同じで混乱を招きやすいが、イギリスで最初の教育学教授職に就いたジョセフ・ペイン (Joseph Payne, 1808-1876) の講義もほぼ同時期に現れている。『教育の学と技法に関する講義』(*Lectures on the Science and Art of Education*) は何度か改訂増補されているが、少なくとも 1876 年には最初の版が出ている (New York: E. Steiger)。また、ペインには『教育史講義及びドイツ諸学校訪問記』(*Lectures on the History of Education with a Visit to German Schools*, London: Longmans Green and Co., 1892.) もある。

以上のうちでラウマーとバーナードによるその英訳、クイック及びジョセフ・ペインの前者の講義は「賢哲畧傳」が書かれる際に参照自体は可能であっただろう。ブラウニングとウィリアム・ペインのものの出版は執筆のごく直近であり、参照は難しかったのではないと思われる。コンペレやペインターのテキストが出たのは「賢哲畧傳」の出版以後であり、参照は不可能である。ただ、著者の死後に編纂出版されたジョセフ・ペインの教育史講義のような例もあり、正式の出版以前にもノート等が得られていた可能性もないとはいえない。

英文のコメニウス紹介書としては、ダニエル・ベンハム (Daniel Benham, 生没年の調べつかず) がコメニウスの『母親学校の指針』の英訳に生涯の概説を付した『幼児期の学校』(*The School of Infancy - An Essay of the Education of Youth, During Their First Six Years*, London: W. Mallalieu & Co., 1858.)、およびスコットランドの教育者サイモン・ローリー (Simon Somerville Laurie, 1829-1909) による『モラヴィアの牧師ジョン・アモス・コメニウス——その人生と教育著作』(*John Amos Comenius, Bishop of the Moravians: his life and educational works*, London: Kegan Paul, Trench & Co., 1881.) がある。後者は長く普及したが、「賢哲畧傳」の前年の初版である。

そこで、ラウマー、そのバーナードによる英訳、ジョセフ・ペイン、クイック、ベンハムの著作の記述と「賢哲畧傳」の記述を突き合わせてみたが、まず「賢哲畧傳」で扱われている人物のすべてが網羅されているテキストはなかった。個々の記述が部分的に一致することはあっても、全体を参照したと思われるものも見当たらなかった。念のため、出版年からして「賢哲畧傳」の参照対象とされたとは考えられない、あるいは考えにくいその他のテキストについても照合したが、記述が十分に対応しているものはなかった。

たとえば、ハーバードによるラウマーの翻訳のコメニウスの章を見ると、出身がモラヴィアのコムニャとされている点、ボヘミアン・ブレスレンの聖職者であったという記載、フルネック滞在時に戦火により蔵書を失ったこと、ポーランドのレシュノで戦火に遭いオランダに避

難する経路などの記述は対応している。しかし、このテキストでは、名前は John ではなく Johann とされているし、『開かれた言語の扉』の表題は The Door of Tongues Unlocked とは英訳されておらず、「舌門」と訳される示唆を与えてはいない。今回の調査の範囲で、The Door of Tongues Unlocked という表題を採用していたのは、クイック、ベンハム、ジョセフ・ペイン、ペインターのものであった。そして「賢哲畧傳」が書かれた当時に出版された英語文献で次の2点が満たされているものは、本稿の段階では見出すことができなかった。

気になる第1点は、コメニウスが言語を重視しつつも事物主義をとったことを論じ、その学習のトピックは、(1) 神、万物（世界）、道理（精神）からなるパンソフィア、(2) 伝記、博物誌、発明史、万国史、徳行家伝、諸宗教の風物誌からなるパンヒストリア、(3) 一種の心理学としてのユニヴェルサルドグマナチックであるという説明である。コメニウスとヒューブナーらとの書簡のやりとり及び『光の道』では、パンソフィアは Sapientia、パンヒストリアは Historia または Historia universalis、パンドグマティアは Philologia、Philologia universalis または Panbibliographia と言い換えられている [KK1: 42, 43, 48, 55, 56, 61] [PK: 26, 46] [DK14: 340-345]。

ユニヴェルサルドグマナチックは、コメニウスがパンドグマティアと呼んだものが英訳されたものをさらにカナ書きしたと考えられるが、当時の英語文献でパンドグマティアを universal dogmatic と表記したものは見つけることができなかった。まず、これらの3つのカテゴリーを紹介しているテキスト自体が少ない。そのなかで例外的ともいえるのが上述のベンハムのテキストである。ただし、ここではパンソフィアは Universal Wisdom、パンヒストリアは Universal History となっているものの、パンドグマティアは General dogmatics と訳されている。この訳語はアメリカの教育学者ウィル・モンロー (Will Seymour Monroe, 1863-1939) による『コメニウスと教育改革の始まり』(*Comenius and the Beginnings of Educational Reform*, New York: Charles Scribner's Sons, 1900) でも踏襲された。真田幸憲 (1875-1950) がモンローの著書をもとにして出版した『近世教育の母コメニウス』(金港堂書籍、1904年) では「普通教条」という訳語が当てられている。ベンハムのテキストは広く普及したとはいえず、「コメニウス氏畧傳」の著者がベンハムを参照したとは考えにくい。もし参照したのなら、「ユニヴェルサル」ではなく「ジェネラル」等と表記するだろう。そして、ベンハムの書物の主題であるコメニウスの幼児教育論が扱われてもよさそうなのだが、「コメニウス氏畧傳」にはそうした言及はない。モンローのテキストが出たのは「コメニウス氏畧傳」の18年後のことである。そこからすると、むしろ「コメニウス氏畧傳」の著者が依拠した他のテキストがあったと考えられそうである。

チェコ地域でコメニウスの再評価に大きな役割を果たしたフランティšek・ゾウベク (František Jan Zoubek, 1832-1890) が著したチェコ語による最初のコメニウスについての単著である『コメニウスの生涯』(*Život Jana Amosa Komenského*, Praha: Edv. Grégra, 1871.) では、

バンドグマティアは、チェコ語で *Dogmatika obecná*、カッコ書きで *pandogmatia* と表記されている。同時期にゾウベクとユリウス・ベーゲル（Julius Beeger, 1829-1899）によって出版された『大教授学』のドイツ語版があり、そこにはゾウベクによるコメニウスの生涯と教育学説の紹介が付されているが、1871 年ベルリン版にも 1876 年ライプツィヒ版にもバンドグマティアに対応する記述はない。この時代に、日本人がチェコ語のテキストを読みこなし、*Dogmatika obecná* をウニヴェルサルドグマナチックと表記するとは考えにくい。

ところで、この時代、『大教授学』のドイツ語訳がもうひとつ現れている。ヘルバルト派の教育学者として知られ、その教育学教科書が翻訳されて明治中期の日本に流布したグスタフ・リンドネル（Gustav Adolf Lindner, 1828-1887）によるものである。リンドネルによる『大教授学』のドイツ語訳に付せられた解説（*J. Comenius, Sein Leben und Wirken*, Wien: A. Pichler's Witwe und Sohn, 1876）では、パンソフィアに *Allweißheit*、パンヒストリアに *Weltgeschichte*、バンドグマティアに *allgemeine Dogmatik* という訳語が当てられている。ちなみに、リンドネルがチェコ語で著したコメニウスの伝記（*Život J. A. Komenského*, Praha: F.A. Urbánek, 1878.）では、パンソフィアは *všemoudrost'*、パンヒストリアは *všeobecný dějepis*、バンドグマティアは *všeobecný dogmatika* という語が当てられている。



図4. イラスト新聞（ライプツィヒ）の1874年8月15日号（ブシェロフ・コメニウス博物館所蔵）

チェコ語の *Dogmatika obecná* とドイツ語の *allgemeine Dogmatik* は違和感なく対応する。リンドネルが用いている *všeobecný* は英語でいえば *universal* に近いが、リンドネル自身、*allgemeine* をあてている。そこからすると、「コメニウス氏畧傳」の著者が、リンドネルのテキストを参照し、ドイツ語の *allgemeine Dogmatik* を英語で *universal dogmatic* と訳し、それをさらにカナ表記にして「ウニヴェルサルドグマナチック」としたという推測もできそうに思える。しかし、リンドネルのテキストではウヘルスキー・プロト誕生説がとられており、コメニウスの生誕地をモラヴィアのコムニャとする「コメニウス氏畧傳」の記述とは一致しない。

さらなる疑問を呼ぶ第2点は、1875年にモラヴィアの教師たちの発願に基づき、

ブラハの彫刻家トマーシュ・セイダンの制作によって、モラヴィアのプシェロフで「水澆石」製のコメニウス像が除幕されたというきわめて詳細な記述である。「賢哲畧傳」の連載の他の人物をあつかったなかで、コルバーンの算数教育法がアメリカで高く評価された等の記述はあるが、それに比してもコメニウスについての記述は飛び抜けて詳しい。この論考の典拠が単一の書物または記事であったとすると、それはプシェロフのコメニウス像が序幕された1874年から1882年の8年間に現れていなければならない。また、この情報に接した者が読むことができたのは、おそらくドイツ語か英語だったと想像される。前述のクイックによる『教育改革家』の出版はコメニウス像の序幕以前のことである。同書は1890年に改訂されるが、それはこの論考が出版された8年後のことであり、念のためにチェックしたが、改訂後のテキストにもコメニウス像についての言及はない。ローリーによる1881年出版の英語による伝記『モラヴィアの牧師ジョン・アモス・コメニウス——その人生と教育著作』にもプシェロフのコメニウス像についての言及はない。そして、既述のゾウベク、リンドネルをはじめ、教育史関係のテキストにも、プシェロフでのコメニウス像の序幕は触れられていない。

そこで、コメニウスが最初に本格的な学校教育を受け、のちにそこで教鞭をとったプシェロフにあるコメニウス博物館の学芸員ヘレナ・コヴァージョヴァー (Helena Kovářová) 氏に照会したところ、プシェロフのコメニウス像についてのニュースは、ライブツィヒで発行された『イラスト新聞』 (*Illustrierte Zeitung*) のほかウィーンでも報道された事実があるとのことだった。2つの記事とも制作者のセイダンについて書かれているが、像が砂岩 (Sandstein) 製であるという記述は、『イラスト新聞』の方である (図4参照)。ただ、当然のことながら、この記事はコメニウスの生涯や思想については詳述していない。コメニウス像についての情報のみがこの新聞記事からとられたとすると、「コメニウス氏畧傳」の著者は、単一の情報源をもとにしたのではなく、複数の文献にあたって執筆した可能性も出てくる。すると、この論考は欧米の書物や記事の単なる翻訳や要約を超えた本格的なものということになる。

ペスタロッチ主義教育の興隆のなかで

「コメニウス氏畧傳」の典拠を明らかにするためのヒントとして他に考えられるのは「賢哲畧傳」で扱われた群像である。コルバーンはアメリカでペスタロッチ主義の算数教育を進めたことで知られる。アガシーは、スイスに生まれアメリカで活躍した海洋学者で氷河期の発見者として知られるが、ペスタロッチ主義の教育学者ジョホノットの『教授の原理と実践』 (*Principles and Practice of Teaching*, New York: D. Appleton & Co., 1878.) では、ペスタロッチやフレーベルとともにアガシーに1章がさかれ、ペスタロッチ主義教育を理科分野で実践した人物として強調されている。このジョホノットのテキストが訳されたのが『如氏教育学』 (有賀長雄訳、牧野書房、上下、1885年) にほかならない。藤原喜代蔵は、「ジョホノットの教

育論は、スイスの博物学者アガシーの影響を受けたもの」と書いている〔藤原 1942: 399〕。そして、アガシーの著作は、すでに 1877 年に『動物生理学』（アゲシー、ゴールド著）として現れている。訳者は、旧幕臣の家に生まれて戊辰の役に敗れたのちに、アメリカ商館に雇われて英語を学んで渡米し、オレゴン州のパシフィック大学で理学を修めて、1876 年に帰国すると直ちに岡山県師範学校教頭となった能勢榮（1852-1895）であった。能勢はコンペレやラインの教育学説を紹介し、『内外教育史』（金港堂書籍、1893 年）も著している。『内外教育史』でルソーの 13 ページを大きく上回り、27 ページが充てられたのは貝原益軒とコメニウスであった。

「賢哲畧傳」で扱われた 9 人のうち、ペスタロッチ、アガシー、フレーベル、コルバーンは明らかにペスタロッチ自身とその影響下にある。ベルはペスタロッチと交流を持っており、フィヒテが『ドイツ国民に告ぐ』で称賛したのはペスタロッチの教育活動だった。コメニウスも、ペスタロッチの直観教授の先駆者と見なされたのであれば、扱われる意味があっただろう。単純に整理するべきではないが、直観教授は感覚の重視を前提にしており、人間認識における感覚の意義を重視すれば、その哲学的立場は観念論よりは実在論に近づく。「賢哲畧傳」で、プラトンやデカルトではなく、アリストテレスとベーコンが扱われているというのは、ペスタロッチ主義的教育の哲学的背景が考慮されたことによると考えられなくもない。ジョセフ・ペインが 1875 年に行った講演「ペスタロッチ、初等教育に対する彼の原理と実践の影響」(*Pestalozzi; The Influence of His Principles and Practice on Elementary Education*, New York: E. Steiger, 1877.) では、ごく簡潔だがペスタロッチとベーコンの哲学的親近性が示唆されている。また、書物として成立するのは「賢哲畧傳」から後のことになるが、バーナードの死後に出版された『ペスタロッチとその教育体系』(*Pestalozzi and His Educational System*, Syracuse: C. W. Bardeen, 1906) にはペスタロッチの直観教授法に至る歴史についての考察が収められ、ベーコンとコメニウスにかなりの紙数が割かれている。そこに掲載されている講演の原稿等は出版以前にある程度は普及していたことだろう。

「賢哲畧傳」が現れた 1882 年から翌 1883 年にかけて、東京高等師範学校の前身である東京師範学校では、アメリカ留学から戻った伊沢修二（1851-1917）と高嶺秀夫（1854-1910）らが小学師範学科教職員講習でペスタロッチ主義教育の普及を図っていた。ニューヨークのオスウィーゴ師範学校に留学した高嶺はヘルマン・クリージ（Hermann Krüsi, 1817-1903）に師事したが、クリージの父はペスタロッチの高弟であり、クリージは高嶺が留学した 1875 年に主著『ペスタロッチの生涯と業績と影響』(*Pestalozzi, His Life, Work and Influence*, New York: Van Antwerp, Bragg & Co.) を著している。同書にコメニウスについての言及はない。しかし、詳しい言及とはいえないものの、アガシー、コルバーン、フレーベル、フィヒテについては触れられている。

この当時、日本では、直観教授法（実物教授法または庶物指教とも）の指南書が多く出版

されているが、『彼日氏教授論』(文部省、1877年)や『塞児敦氏庶物指教』(上、文部省、1878年)には直観教授についての歴史的言及はない。しかし、『加爾均氏庶物指教』(上、文部省、1877年)の緒言ではコメニウスはペスタロッチに先立つ直観教授の先駆者として紹介されている。また、東京師範学校附属小学校に勤めた若林虎三郎(1855-1885)と白井毅(1858-1925)による『改正教授術』(巻一、普及舎、1884年)では、教育方法の改革者としてペスタロッチ、フレーベル、アガシー、スペンサー、バインの名があがっている。さらに、1886年発行の『庶物指教用解説』(文部省編輯局)では、冒頭にコメニウスが紹介され、そののちペスタロッチがとりあげられている。これは、江戸幕府の英語学校教授を務め、維新後は文部省、大蔵省、工部省などで勤めた瓜生寅(1842-1913)が著し、次稿でとりあげる山縣悌三郎(1859-1940)が補訂している。『千葉教育会雑誌』の連載でとりあげられた人物が、当時のペスタロッチ主義教育の普及のなかで触れられた面々に対応しているのは明らかである。

(以下、『佛教大学教育学部学会紀要』第19号に続く。)

[注]

- (1) 山田園子は、『歐米大家教育格言』は「渡辺嘉重がキング卿(Lord King)の編書をもとに、ロックの教育論を格言にして整理したもの」[山田 2012: 33]としているが、キングの編書が何を指すのかの調べはつかなかった。

[引用(参考)文献]

*本文中で注記した文献のみを示す。コメニウスの全集・書簡集からの引用は以下に示す略号と巻数・ページ数で示した。

DK: *Dílo Jana Amose Komenského*, Praha: Academia, 1969-

KK: *Korrespondence Jana Amosa Komenského*, vyd. Jan Kvačala, Praha: České akademie císaře Františka Josefa pro vědy, slovesnost a umění, díl1, 1897.díl2, 1902.

PK: *Jana Amosa Komenského Korrespondence*, Sebral a k tisku připravil Adolf Patera, Praha, 1892.

石橋哲成・清水徹編、「日本におけるペスタロッチー研究文献目録」、教育哲学会、『教育哲学研究』、第76号、1997年。

井ノ口淳三、「コメニウス関係文献目録(2000年7月～2001年6月)」、日本コメニウス研究会、『日本のコメニウス』、第11号、2001年。

井ノ口淳三、書評「相馬伸一著『コメニウスの旅』」、日本教育学会、『教育学研究』、第86巻第3号、2019年。

岩下誠他、「座談会=教育学の実践性とは何か 教育哲学をめぐる」、下司晶・丸山英樹・青木栄一・濱中淳子・仁平宏典・石井英真・岩下誠編、教育学年報11、『教育研究の新章』、世織書房、2019年。

浦田まり子、「明治期におけるフレーベル紹介」、『東京女子大学附属比較文化研究所紀要』、第33号、1972年。

太田光一、図書紹介「相馬伸一著『コメニウスの旅——〈生ける印刷術〉の四世紀』」、教育史学会、『日本の教育史学』、第62号、2019年。

梶山雅史・須田将司、「都道府県・旧植民地教育会雑誌 所蔵一覧」、『東北大学大学院教育学研究科研究年報』、第54集第2号、2006年。

酒井玲子、「明治期におけるフレーベル教育論の考察」、『北星論集（文）』、第38号、2001年。

相馬伸一、「他なる景色に手を伸ばせ——旧市街より——」、教育哲学会紀要『教育哲学研究』、111号、2015年。

相馬伸一、『コメニウスの旅——〈生ける印刷術〉の四世紀——』、九州大学出版会、2018年。

藤原喜代蔵、『明治大正昭和思想学説人物史』、第1巻明治前期編、東亜政経社、1942年。

眞壁宏幹、書評「相馬伸一著『コメニウスの旅——〈生ける印刷術〉の四世紀——』、教育哲学会、『教育哲学研究』、第119号、2019年。

山田園子、「戦前日本におけるジョン・ロック研究——高野長英から白杉庄一郎まで——」、『広島法学』、第36巻第1号、2012年。

〔謝辞〕

本稿を成すにあたって、佛教大学附属図書館、広島修道大学附属図書館、広島市立大学附属図書館の蔵書を利用した。また、佛教大学附属図書館参考調査係の尽力で、本稿で紹介した論考のコピーを入手した。プシェロフのコメニウス像の序幕を報じた新聞記事は、チェコ共和国のプシェロフ・コメニウス博物館のヘレナ・コヴァージョヴァー氏の厚意で入手した。クレッペルの『教育哲学史』で紹介された『世界図絵』の挿絵のオリジナルは一橋大学附属図書館より入手し掲載許可を得た。以上、記してお礼申し上げる。

〔付記〕

本研究は、科学研究費補助金・基盤研究（B）「教育思想史のメタヒストリー的研究」（17H02673）による研究成果の一環である。本研究の過程で明らかにできなかった点は本文中に記載しているが、ご教示をいただければ幸甚である。

（そうま しんいち 教育学科）

2019年11月13日受理